



## 聖化に憧憬する心、俗世で生きる勇氣

修験道と山伏

山の奥深くまで入り、修行によって神秘的な力を得る山岳信仰を修験道という。修験道は古来の山岳信仰が、仏教、密教、中国の宗教である道教や儒教などの外来の宗教と結びついた日本独特の宗教といえる。修験道をする修験者を山伏という。羽黒山、英彦山として熊野大峰山は「日本三大修験山」とよばれ、山伏の修験道場として有名である。山伏にとって、山はこの世と地続きの他界である。山に入ることは母胎内で生まれ変わることに



頭襟をつける修験者

同じだ。山伏はその象徴として、固めた和紙や黒く染めた木で作った頭襟を額につける。それには、大日如来の「五智宝冠」と不動明王の「八葉蓮華」をあらわす二種類がある。特徴的な服装と浮世離れた姿は、伝説の天狗によく似ているともいわれる。

「他界」からの映像  
二〇〇二年、還暦をむかえたドキュメンタリー映画監督・北村皆雄は「生まれかわりの年に何か自分に記念すべきことをやろう」と考え、素人山伏として九日間羽黒山修験に参加した。その後、修験に深く感動した北村はそれを記録することを決意し、二年間にわたる撮影を続け、二〇〇三年と二〇〇四年の「秋の峰」修験を記録した。本映画はこうして誕生し、一〇五名の山伏が九日間にわたり山にこもって修験する全儀礼が描かれる。体験した人にしか知りえない「門外不出」といわれる羽黒山の秘行が、初めて完全に記録され我々の眼前にあらわれる。

儀礼のプロセスは次のようである。まず、修験者は「再生」の前に「擬死」しなければならない。入山前に、修験者は山駆けし、疲労が蓄積した状態になる。そして、断食をしながら経を読む。さらに、唐辛子の粉末に乾燥させたドクダミを混ぜたものを焚き、その煙のなかで過ごすという、つらい「南蛮いぶし」を経る。こうして俗世の欲を削いでいく。この過程は、体が地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天という六道輪廻の苦しみをめぐり、過去、現在、未来の三世で何度も死に、そして再生することとされる。その度に、松明の火を体で受ける儀式をおこなない、魂を浄化する。「受胎」

## 「修験 羽黒山秋の峰」

2005年／日本／日本語／115分／DVDあり

監督：北村皆雄

語り：浜畑賢吉

協力：羽黒山荒澤寺正善院

修験者の行列  
(写真はすべて映画「修験 羽黒山秋の峰」より。  
北村皆雄提供)



の儀礼によって、新しい生命が誕生する。すなわち「即身即仏」としてむかえられる。

「この世」に戻る力

江戸時代まで、山伏は神秘的な力を持ち、農作物を守る事ができると信じられていたので、重宝され人数も多かった。しかし、

その後、西洋の科学的な考え方が広まり、民間信仰への関心は薄らいできた。勢力が衰えたとはいえ、修験道は今日まで二〇〇〇年以上続いている。映像には、初体験の者から二〇回目を数える者までが登場する。古来の山岳信仰への憧憬のほか、修験道には別の特別な魅力もあるようだ。

ある山伏は「擬死」を体験することはとても苦しく、一人では絶対に無理だが、みなと一緒にならばできるという。みなと一緒に苦しむ一緒に再生することで、他人との連帯感を得たり、達成感を味わうことは、修験道の現代的な意義のひとつだとわたしは思う。中国で

何度も軍事訓練を受けた経験があるわたしは、精神的な忍耐力と身体的な苦しみを乗り越え、苦楽とともにした仲間が共感しあうというそのときの体験を思い出した。

むかし、修験者は個人的な苦行により

浮世から離れて力を得た。現在の日本の大都會には、独居や孤食というような物理的な「他界」に加え、孤独や疎外感といった精神的な「他界」もあるようだ。修験者は修験での集団行動をとおして、人は互いに支え合って生きていることを認識し、それらふたつの「他界」を超越して、「この世」に戻る力を得る。中国に「大隱隠于市(崇高なる隠者は街にまぎれる)」という諺がある。山に行き俗世と離れること自体は困難ではない。むしろ、その後、浄化された心で俗世を生きていくことにこそ、大きな力と勇氣が必要である。神秘的な映像の影に、現代日本がおかれた社会の陰を見つめることも決して深読みとはいえないだろう。



修験の火